

ASEAN5か国の日本語教師たちによる 21世紀型能力の評価

ー「コラボレーション (Collaboration)」のルーブリックを作成する試みー

木谷直之・築島史恵・二瓶知子

1. 背景

国際交流基金は、2012年度より、かめのり財団と共催で「にほんご人フォーラム」事業を行っている。「にほんご人」とは、「国際社会において日本語を使って何かを達成したいという意思を持ち、そのために日本語でコミュニケーションをする人々」の総称であり、事業の目的は、①若い世代に求められる能力の育成を目指した外国語教育のアプローチの共有と実践、②中等教育における「にほんご人」ネットワークの形成、③若い世代の相互理解の促進とグローバル人材の育成の3点である。

本事業はASEAN5か国（インドネシア、タイ、フィリピン、マレーシア、ベトナム）を対象としており、その中等教育機関の教師と生徒が一堂に会して原則として日本で約2週間行われるフォーラム（以下、「フォーラム（日本）」）と、海外各国で行われるフォーラムで構成されている。そして、1年間の準備期間と3年間の第1フェーズにおける試みを経て、2016年度より、第2フェーズ^①に入った。

「フォーラム（日本）」には、本稿で取り上げる「教師プログラム」と「生徒プログラム」という2本の柱が設けられている。第1フェーズにおける教師プログラムの枠組みは、主として生徒プログラムの観察および授業実践の計画の共有の2つであった。紙幅の都合上、その成果については割愛するが、課題としては、授業の計画を共有するだけでは、教師達が「若い世代に求められる能力」について本当に教育現場で実践するところまでは理解できていないのではないか、そのための姿勢や力を十分養えていないのではないかと、という点が挙げられた。そこで、第2フェーズでは、この教師プログラムに新しく①現場を踏まえた実験授業の教案を作成し、生徒プログラムの参加者を生徒役として試行すること、②実験授業の試行や生徒プログラムの協働活動等の観察を通して、新しい能力の評価方法を具体的に検討すること、③実験授業の教案作成やリハーサル、試行等の際の協議や振り返り（内省を含む）を充実させることという3つの目標を立てた。

第2フェーズ初年度の「フォーラム（日本）」は、上記5か国の中等教育機関の教師11人とその国の高校生および日本の高校生計24人^②が参加して行われた。本稿では、このうち、教師プロ

グラムの目標②で行った評価方法の検討に焦点を当てる。その理由は、この検討のプロセスが、「若い世代に求められる能力」とは具体的に何か、その能力を育成するためにどのように授業を創ればいいのか、そして生徒の授業参加をどう観察・評価すればいいかを参加教師が丁寧に議論し、新しい能力育成を日本語教育の現場で扱う意義を改めて熟考する機会となったためである。これを公表することで、今後、他の日本語教育関係者のみならず、国内外で同様の試みを行っている他の外国語教育の関係者とも議論の端緒を開きたいと考えている。

2. 教師プログラムの前提となる「21世紀型能力」

本事業の目的として挙げた「若い世代に求められる能力」について、本稿では、以下、「21世紀型能力」と記す。この21世紀型能力は、今世紀に入って大きく変化している世界の教育の潮流の中で、ASEAN 各国の教育施策にも新しく盛り込まれ、それぞれの国の背景や文脈で方針の中に位置づけられている。中でも各国の教育に大きな影響を与えているのは、2003年にOECD（経済協力開発機構）のDeSeCo（Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations）が定義した「キー・コンピテンシー（Key competencies）」と、2002年にアメリカのP21（The Partnership for 21st Century Skills）が提唱し、その後ATC21S（Assessment and Teaching of 21st Century Skills）において定義された「21世紀型スキル（21st Century Skills）」という2つの資質・能力観である。教師プログラムでは、参加者に事前課題1として、現在、自国の中等教育の政策や政府の方針がこの21世紀型能力に関連して大切にしている考え方と、その中で外国語（日本語）の授業で育てていかなければならない能力についての説明資料の作成を課し、プログラムの最初に、そのプレゼンテーションを求め、参加者で共有を図った。

3. 教師プログラムの内容

次ページの図1は、生徒プログラムとの連携も含めて教師プログラムの全体をまとめたものである。第2フェーズの教師プログラムの内容には、大きく21世紀型能力を育成するための実験授業の実践とその評価方法の検討の2つの流れがあり、日程は、図1のように大きく第一段階、第二段階、第三段階の3つに分けられる。以下、各段階の内容を簡単に述べる。

3.1 第一段階：参加者間の情報共有と議論のための基盤作り

プログラム参加者の教育現場についての情報共有を通して、本プログラムで検討する実験授業と評価方法についての議論が活発に行われるための基盤作りを目標に、以下の活動を行った。

- (1) 教授環境の共有：参加者の所属機関について、学年、学習者数、授業時間数、教科書等の情報共有を行った。

- (2) 事前課題1の共有：2章で述べた事前課題1について、1か国25分程度（説明15分、質疑10分）で発表した。
- (3) 事前課題2の共有：事前課題2は、事前課題1を踏まえて、「新しい時代のための能力」を育成する実験授業案を作成してくることであった。教師たちは、国ごとに、その授業で育成できると思われる能力に言及しつつ授業案の説明を行った。授業で育成したいと考える21世紀型能力として、「コラボレーション (Collaboration)」、「創造力 (Creativity)」、「リーダーシップ (Leadership)」、「批判的思考 (Critical thinking)」などがあげられた。

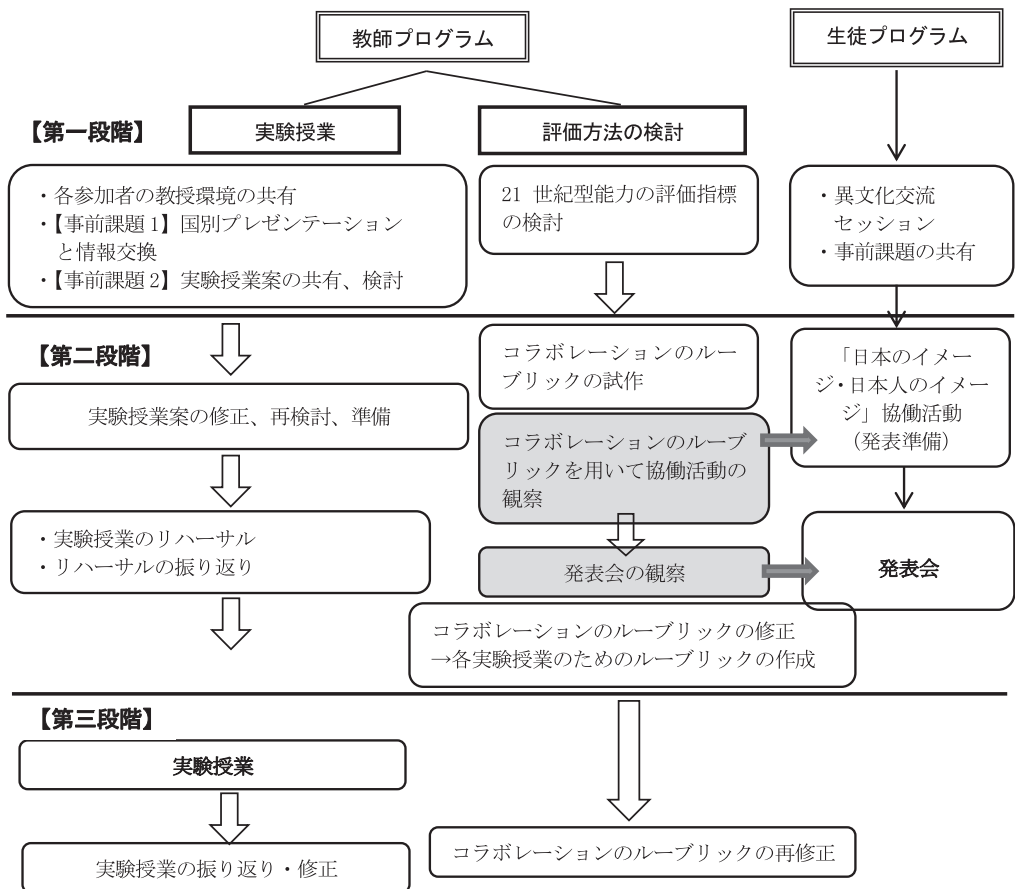


図1 生徒プログラムとの連携も含めた教師プログラムの概要

3.2 第二段階：実験授業の準備と21世紀型能力のルーブリック（評価表）の作成

(1) 実験授業の計画と準備：

第一段階で発表した教案（事前課題2）について、3人ずつ異なる国の教師でチームを作り、互いの教案について意見交換を行い、その結果をクラス全体で共有した。そこで、一つの授業

でいくつかの能力の育成を考えることは現実的ではないこと、日本語で行わせる活動と母語でよい活動を明確に整理する必要があることの2点が確認された。その議論を踏まえ、研修の担当講師と書き直した教案の更なる検討、修正を行い、リハーサルを行った。リハーサル後の振り返りでは、以下の3点について活発な議論があった。

- ①グループワークの過程の中で指示の出し方や声かけの量や方法などが適切であったか。
- ②最後のポスター作成や発表に向けて練習や活動が有機的に繋がっていたか、それらは必要かつ十分なものだったか、そして生徒がそのことを十分に意識できていたか。
- ③授業担当の教師が考えている21世紀型能力が、授業の中でしっかり扱われていたか。

以上の議論を通して、教師がグループワークで出す指示の表現や、その前後の授業の中ではさむ一言で、教師が扱いたい能力に関する学習者の意識が変わるのではないかという意見が出され、それぞれのチームで、教師の発話一つ一つも、丁寧に見直そうという姿勢が生まれた。

(2) ルーブリック作成の作業：

上述の授業計画すべてに共通して扱われている21世紀型能力がコラボレーションであることから、今回の教師プログラムではこれを重点的に扱うこととした。そして、まず、1回目の生徒プログラムの協働活動^③を観察し、コラボレーションができるというのはどういうことかを書き出し、議論を行って、以下のようなルーブリック第1版を試作した。

表1 コラボレーションのルーブリック 第1版

	あまり できなかった	てつだいなどが あてできた	スタンダード	とても よくできた
①グループの目標のために、時間、役割、材料（使うもの）を決めることができる				
②自分の意見やアイデアを友だちに言うことができる				
③友だちにわかるように、工夫したり、簡単な言葉を使ったりして説明できる				
④バラバラの意見を一つにまとめることができる				

そして、このルーブリックを生徒プログラムの発表準備のための協働活動観察の際に試用し、実際に各項目について評価作業を行い、その後、振り返りを行った。振り返りでは、ルーブリックの各項目をどういう視点で評価したか、評価しにくかった点はどのような点であったかについて意見を出し合った。以下に各項目について出されたコメントをまとめる。

表2 各項目について出されたコメント

項目①	<p><高く評価できると思われるポイント></p> <p>「リーダーが他の人の仕事をチェックしていた。」「互いにわからないことをわかりあえるように手伝っていた。」「work process が早かった。」</p> <p><低い評価になるとと思われるポイント></p> <p>「リーダーがメンバーの話を聞かなかった。」「あちこち動いているだけで機能していなかった。」</p>
-----	--

項目②	<p><高く評価できると思われるポイント> 「自分の意見を言うだけでなく、他の人に尋ねていた。」「ディスカッションができていた。」</p> <p><低い評価になるとと思われるポイント> 「自分で理解しようとせず、いつも通訳してもらっていた。」「声が小さくて聞こえなかった。」</p>
項目③	<p><高く評価できると思われるポイント> 「いろいろな工夫をして、伝えようとしていた。」「物を使ったりジェスチャーを使ったりして努力していた。」「説明がうまくできない友達を励ましていた。」</p>
項目④	<p><さらに考えていかなければいけないと思われた点> 「結果的に「一つにまとめる」ことになったとしても、リーダーと他の人の意見が違った場合、あまりみんなの意見を取り入れずにリーダーが決めた場合と、全員が意見を出し合って話し合えた場合ではコラボレーションの力は異なり、今の項目記述では、その差が現れていない。」「見るタイミングによって評価が変わる。」「グループ全体の評価と一人の評価をどのようにすむ方がいいか。」「学生の心の中をチェックするのは難しい。」</p>

議論を踏まえ、上掲のループリック第1版は、評価項目④を「バラバラの意見をみんなで協力して一つにまとめることができる」と変更し、ループリック第2版とした。

そして、この第2版を持って生徒プログラムの発表会を観察した。発表会は、日本の参加者を含む高校生24名が多国籍の4グループに分かれ、「日本のイメージ・日本人のイメージ」というテーマで集めた資料やデータを整理・分析してプレゼンテーションした。しかし、教師からはプレゼンテーションを見ただけでは、特にコラボレーションの評価は難しいという声が多く出された。21世紀型能力の評価には、プロセスの観察が重要であるという意見がまとまった。

一方、各チームは、実験授業の最終準備に加え、それぞれの授業で育成しようとしている力（主にコラボレーション）を客観的に評価できると思われるループリックを作成し、教案と共に授業を観察する他のメンバーに配付し、共有した。一例として、タイ・チームが作成したコラボレーションのループリック⁽⁴⁾を以下に示す。

表3 タイ・チームのコラボレーションのループリック

	あまり できなかった	てつだいなどが あつてできた	スタンダード	とても よくできた
①自分の意見やアイデアを友だちに言うことができる				
②友だちにわかるように、工夫したり、簡単な言葉を使ったりして伝えられる				
③バラバラの意見をみんなで協力して一つにまとめることができる				

3.3 第三段階：実践

(1) 実験授業：

各国45分で実験授業を行った。学習者は生徒プログラムに参加していたASEAN5か国の高校生20名。グループワークは、1グループ5人の多国籍メンバー（計4グループ）で行われた。各チームの実験授業の内容は以下のとおり。

表4 各チームの実験授業の内容

チーム	実験授業の内容
インドネシア	視聴覚教材を使って学園祭などでよく売られている食べ物や飲み物などの言葉を確認し、その後、自分たちの学校の文化祭で出す食べ物の店をグループで作し、ポスター発表する。どんな食べ物を出すか、味や形はどうするか、グループで話し合っで決める。
タイ	料理に関する言葉や表現を写真等で練習・確認した後、グループで体にいいファストフードのメニューを考えてポスター発表する。発表していないグループは、発表を採点し、全体共有する。
フィリピン	参加者の国のスーパーヒーローの写真をしながら、どの国のヒーローか、どんなヒーローかを確認する。その後、災害についての情報を共有し、グループで災害を救うスーパーヒーローの絵を描いて、ポスター発表する。最後に、今日の授業で何を勉強したか、どんな問題が解決できるかをクラスで確認する。
ベトナム	いろいろなロボットの動画や写真を見せ、そのロボットは何ができるか確認する。グループに分かれて自分たちの学校にほしいロボットを考え、ポスターに描いて発表する。
マレーシア	グループで、自分達の体を使って音楽とリズムを作って発表し、感想を共有する。いくつかの音楽を聴き、使われている楽器を確認して、どの楽器もオーケストラの中でそれぞれ必要な存在であることを意識させる。最後に、社会における自分はどんな人かを付箋紙に書き、模造紙に準備された自分の顔写真のところに貼る。

実験授業の後、振り返りの時間を持った。その中で、グループワークと教師の行動についての議論では以下のような問題点と改善案が出された。

表5 実験授業の問題点と改善点

グループ活動について	<p><問題点> 「何もしていない生徒、参加できない生徒がいた」「役割を分担する」ことを評価項目にしていたが、ただ分担してしまうことで、かえってコミュニケーションの少ないグループがあった」</p> <p><改善案> 「グループサイズをもっと小さくする」「グループメンバーを時々替える」「教師が介入する」「参加度が高い生徒をほめる、評価に入れる」「グループワークに参加することが大切なのだとすることをわかってもらう」「発表の際も、短くても全員が話せるように指示を出す」</p>
教師の行動について	<p><留意する必要があると思われた点> 「話すスピード、声の柔らかさ」「活動のための時間（今まで想定していたより時間がかかる）」「説明の量、タイミング、内容（特にグループワークの内容や、発表の仕方、評価に関わる点など）」「一つの活動から次の活動へ移る流れ、その時の発話」「学生がどれくらい理解できたかの把握の方法」「グループワーク中、教師がどこでどのように声をかけるか」「学年や生徒の特性によって、授業をどのようにアレンジすればいいか」</p>

(2) ルーブリック作成の総括：

ルーブリック作成の総括を行った。実際には現場によって異なるものが作られる必要性を確認したもの、本プログラムでのルーブリック最終版を次ページの表6のようにまとめた。

4. 成果と課題

本プログラムでは、プログラム参加者による評価と外部評価者⁽⁵⁾による評価を行った。まず、プログラム全体についての評価では、4段階評価のアンケートで全員が「とても満足した」「満

ASEAN5か国の日本語教師たちによる21世紀型能力の評価

表6 コラボレーションのルーズブリック 最終版

評価 ポイント	C あまり できなかった	B てつだいがあった ／すこしできた	A Standard	S とても よくできた
①グループの目標のために、「時間」「役割」「材料(使うもの)」を決めることができる	なかなか役割をわけてられない。時間内にきめられない	先生やほかのグループの人がつだってきめられない	時間と役割と材料を時間内にきめられる	時間と役割と材料をはやくきめられる(先生がきめたポイント以外のものを使うことができる)
	仕事をわけないで、一人か二人です。時間をまねることができる。きれないにかたづけられない。	仕事をわけても、せきいんを。時間のコントロールが少しできる。使いたいものを自分できめる。	仕事をわけて、せきいんをもてる。時間を使いしよにきめて使う。使ったものをきちんとかたづける。	自分の役割がいかに、ほかの人のをつたうことができる。
	やることがない人がある	自分がとくなことしかやっていない	きまってる時間通りにかんせんできる。みんなやることがある。いいかげんを出すために、使うものをきめることができる。	

評価 ポイント	C あまり できなかった	B てつだいがあった ／すこしできた	A Standard	S とても よくできた
②自分の意見やアイデアを友だちに言う	自分の意見をださないで、だまっでほかの人の意見をきいている	他の人の意見をじゆうぶんに考えないでかんせんする	自分の意見をだすことができる	理由を言いながら意見をだして、ほかの人がよくわかるようにする
↓ 1人 ↓ 自分の意見やアイデアをだす	リーダーが一人できめる	グループの中の3人が意見をだすことができる	グループの中でだれでも意見をだすことができる	せつとくができる
↓ グループ	さんかしたくない、テーマにきょうみがない、自分のアイデアがない	つたえたいことをうまくつたえられない	意見やアイデアをうまくつたえることができる	
		つたえたいことを全部はつたえられない		

評価 ポイント	C あまり できなかった	B てつだいがあった ／すこしできた	A Standard	S とても よくできた
友だちがわかるように、くふうしたり、かんたんことばを使ったりして説明する。	自分の意見を言うとき、ほかの人がぜんぜんわからない	自分の意見を言うとき、ほかの人、もわからない人もある	自分の説明がないよう、ほかの人がわかる	ほかの人がわかるように、かんたんことばで説明してから、わかったかどうかくにんできる
	友だちがわからなくてまてていない、もしくはあげようとする、説明がわかりにくい	友だちがわからなくてまてているとき、もう一度、かんたんことばやジェスチャーで説明ができる	友だちがわからなくてまてているとき、友だちがわかるように、写真やなどでも説明できる。友だちがわかることばで説明できる	

評価 ポイント	C あまり できなかった	B てつだいがあった ／すこしできた	A Standard	S とても よくできた
①パラバロウの意見を、みんなを協力して、ひとつにまとめる。	一人だけの意見をほかの人にきかせない	またまた意見にかんせんしない人がある	みんなの意見やアイデアをいっしょにまとめることができる	みんなの意見やアイデアをいっしょにまとめる、かくにんできる
	時間がオーバーしても一つにまとめられない	のうりやく(日本語・アイデア)が高いメンバーが一人できる	みんなうまくまとめる、ほとんどの人がかんせんしている	はや一つにまとめることができる。みんながかんせんしている
	ひとりだけ?	ふたり、さんにん	ほとんど?	みんな?
		40～60%?	80%? 100%?	100%?

足した」と肯定的に評価していた。自由記述では、「今までは活動と21世紀型能力の関係を考えなかったが、今大切だということに気づいた」「授業のテーマや活動をよく考えて、どんな21世紀型能力を入れるか、授業の流れをどうするか、誰がどのように評価するかこれから考えたい」のように、自身のこれまでの教授経験を内省し、21世紀型能力を授業に取り入れようとする姿勢が数多く見られた。外部評価でも、内省を伴う対話が繰り返され、考えが深化していったことについては高く評価された。ただ、それだけに短期間での議論が収束しきれなかったこと、実験授業の振り返りが改善まで至らなかったことなどの指摘があった。

最後に、教師プログラムの目標②（学習者の能力の新しい評価方法の検討）に対する評価について述べる。プログラム参加者と外部評価者から出された評価コメントの主たるものは、次ページ表7の通りである。プログラム参加者からは、日本語学習を評価することの捉え直しや、評価基準と授業の関連性、グループワークを評価することの意義についての記述が目立った。外部評価者のコメントにもあるように、グループやクラス全体でのディスカッションを通して、一つの能力について観察の観点を深く考えたこと、また自分たちで作上げたループリックを、実際に生徒プログラムの活動見学や、各自が行う実験授業の中で検証したことが、グループの活動を観察する必要性やその難しさ、21世紀型能力の育成を評価することの意義を改めて考えることにつながったのではないかと考えられる。

表7 新しい評価方法の検討・試作作業についての評価

	プログラム参加者	外部評価者
評価	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで日本語能力だけ考えて評価していたが、日本語を勉強することでどんな21世紀型能力ができるかも考えなければならない。 ・評価基準や評価の仕方について今まであまり気をつけていなかったが、評価基準を作るときは生徒のレベルや活動でどんなことをするかも考える必要がある。 ・国でグループワークを採点したとき、観察したりよく考えないまま採点していた。もっと学生の能力をチェックして、ルーブリックを考えたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・協働は限られた時間、機会で一人一人を評価することの難しい事柄だが、こういった形で観察することができるのか、どのような行動に着目すべきかを十分に考えた上で観点整理をしたことが、研修の観察からも成果として示されたルーブリックからも伺えた。 ・まとめにおいて各自が書いた付箋を見ると、自分たちが作ったルーブリックで本当に評価できるのか、評価について考えるのは難しかったが大切だ、といったコメントがあり、評価についてかなり深く考えたことが推測される。
改善	<ul style="list-style-type: none"> ・評価のポイントのディスカッションの時間が足りなかった。 ・大切なポイントはまだ十分わかっていないような気がする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観点がさらに説明を要する抽象的な言葉となっている場合があった。帰国後の実践の中で具体的な表現を模索する必要がある。 ・協働は評価が難しいものであるがゆえに、基準をいかにわかりやすく記述するかが重要。

一方、改善すべき点として、目標②についてもディスカッションの時間が足りなかったこと、また評価基準における記述の抽象性が指摘された。今回の「フォーラム（日本）」における教師プログラムでは、授業を計画しながらルーブリックを作成し、生徒プログラムや各自の模擬授業の中で使用、検証するという一連のプロセスを通して、より深く21世紀型能力を理解することを目指したが、やはり2週間という短い時間の中で完成された評価基準を作り上げることは難しい。参加者にはむしろ、帰国後に同国の教師同士で同じようなディスカッションや検討を行い、各国にあった評価基準を作成してほしいと考えている。しかし、次年度の「フォーラム（日本）」でも、このような取り組みを継続的に行い、日本語教育の中で取り上げるべき21世紀型能力は何なのか、それをどのような段階で誰がどのように評価すればよいのか、ASEAN5か国の教師たちと一緒に検討を続けていきたい。

〔注〕

⁽¹⁾ 本事業は準備期間1年間と3年ずつの3段階のフェーズ、全10年間で企画されている。各フェーズの目的や枠組み、概要は、その前年度、それまでの成果と課題を振り返り、事業全体の目的を具現化して設定している。

⁽²⁾ 海外の教師の選考は、基金の現地事務所では応募者から審査しており、高校生の選考は、現地事務所が各国の教育省や参加教師と相談しつつ決定している。日本の高校生については、かめのり財団が日本語国際センターと相談しつつ決定している。

⁽³⁾ 今回の生徒プログラムの内容は、生徒や自国の生徒の周りの人々が持っている日本や日本人のイメージを検証する、というものであった。1回目の協働活動では、自分達が持っているイメージや情報を出し合ったのち、検証するテーマや観点、およびその方法（調査・観察する場所やインタビュー相手など）を相談した。

⁽⁴⁾ 実験授業の中で行う活動については、教師が活動の進め方として、予め時間や材料などを決めて行ったため、表3では、表1の①の項目が削除されている。

⁽⁵⁾ 教師プログラム、生徒プログラムは各々、大学教員1名に外部評価を依頼している。